

『宗門統要集』の書誌的研究

椎名宏雄

一、問題点

韓國の畏友、金知見博士から貴重な古逸仏典の影印集成、『曉城先生八十頌寿高麗仏籍集佚』の巨冊を恵与されたのは、一九八六年正月のことであった。まことに『祖源通錄撮要』のページを開くと、卷首に『宗門統要集』が引かれているのを見て驚いた。

この『撮要』は、かの『景德伝燈錄』の撰者として異説のある西余拱辰が、熙寧四年（一〇七一）ころに編した『祖源通錄』二四卷の撮要として注目すべきテキストである。『統要集』の成立は、これまで一二世紀初めごろとされている。とすれば、一世紀に成った『通錄』がそれをなぜ引いているのだろうか、という単純な疑問をいだいたからであった。

ところが、よくみると、『祖源通錄撮要』の中には、『統要集』からの引文が巻末にもあり、また、西天祖師の章の全文

は、『伝燈錄』による引文である。とりわけ、第一七祖般若多羅尊の末尾には、「此下多出祖源通錄」とみえる。つまり、本書は全体が『祖源通錄』からの撮要なのではなく、主要部分のみを摭擷し、前後は『伝燈錄』や『統要集』の引文で構成されているのである。われわれは、いたずらに「撮要」の二字に眩惑されはならない。

ただし、いま、『統要集』からの引文にかぎっていえば、その明示される巻数は、宋版の『統要集』のそれに一致し、元代に増補された『宗門統要續集』の巻数とは合致しない。すなわち、『撮要』の編者は、朝鮮初期と、いう時代において、珍しい『祖源通錄』を依用するのみならず、宋槩本の『統要集』をもみていたのである。

禪門の代表的公案とその拈古の集成書、『宗門統要集』一〇巻は、その文献的性格のゆえに、宋代を通じてそこぶる禪侶に愛好され、いくたびも開版を重ねた禪籍であった。した

がって、宋元代の大蔵經には入藏こそされなかつたものの、該書はたんに便利な公案集としてのみならず、權威ある禪の古典として、当代の禪界でおおいに重用されたのである。

すでに柳田聖山氏によつて指摘されるように、福州版大蔵經の要文類を集録する陳実の『大蔵一覽集』(一一五七序)が、『景德伝燈錄』や『禪林僧宝伝』とともに『統要集』を多く引くのは、當時この書が入蔵書と同等の扱いを受けていた証左である。また、石井修道氏によつて解説されてゐるよう、『宗門聯燈会要』(一一八三)三〇卷や『宗門会要』(南宋初期の成立で逸書)などの公案集成の書は、いずれも『統要集』を根本資料としており、また、わが道元の『正法眼藏』の撰述に重要なかかわりをもつといふ真字『正法眼藏』三〇〇則の典拠も、また『統要集』からものが多いことなど、いずれも注目に値する。中世はじめの東福寺に、三本の本書が所蔵されていた事実も、つとに知られるところである。さきの『祖源通錄撮要』や、清代の『列祖提綱錄』や『宗門拈古彙集』などへの影響⁽⁶⁾は、すでに本書の古典としての權威を示すものであつた。

このように、本書は、成立直後の宋代禪界と、当時の禪を将来したわが中世初期の禪林に対して、予想以上に大きな影響を与えてゐるのである。したがつて、看話禪の全貌を解明するためには、基礎的な作業の一つとして、本書の文献的思

想的究明は、すこぶる重要なである。

ところが、現在一般にみられるテキストは、元代に増補された『宗門統要続集』二二一卷の系統であつて、決してもとのままではない。明藏本(万曆藏本)をはじめ、わが黄檗藏本・縮藏本・卍藏本などの流布本系のテキストは、いずれもこの二二卷の『続集』であつて、増補と明示される部分だけを区別しても、到底宋代の原型には復しえないし、また、宋代の成立や刊行の実情をることはできないのである。

こんにち、『統要集』の宋版は、大陸における所在を知らない。あるいは、すでに所伝を断つてゐるのかもしれない。ところが、本邦には、さいわいにも、京都東福寺・叡山文庫・東洋文庫・大東急文庫・内閣文庫などに、宋元版の現存が知られてゐる。

しかし、これらの中では、国の重文に指定されている東福寺本がもつとも有名であるが、その研究は、わずかに長沢規矩也氏による刻工の調査報告⁽⁷⁾があるのみである。また、大東急文庫の零本についても、近年までは簡単な紹介がなされるだけであつた。内閣文庫本は古くから目録で知られながら、これを研究したものを知らぬ。他の所蔵本についても、近年までは何の紹介もみない。本書の地位が前述のようであるだけに、およそ禅籍研究の立場からの調査報告や紹介が近年まで皆無という状態は、古版類の閲覧が容易でなかつたことに

もよるが、禪界における古版禪籍に対するテキスト研究のところを、如実に象徴するものであった。

こうした状況にあって、はじめて東洋文庫本の宋版テキストに本格的なメスを入れたのが、やはり柳田聖山氏と石井修道氏であった。両氏による調査報告は、昭和四八年のほぼ同時期に別個に公表されたが⁽⁸⁾、ともに本書に対する本格的研究の第一歩として銘記されなければならない。とくに石井氏のそれは、本書にみえる本則と拈提宗師のすべてについて、本書と『宗門聯燈会要』の典拠をつぶさに比較検討した労作を含む論攷であり、本書が『聯燈会要』の成立によよぼした影響の大きさを実証的に解明された功績は大である。柳田氏の調査報告もまた、本書のいだく基礎的な諸問題に対して、鋭い洞察を与えた、簡にして要をつくす論攷であった。

これら両氏の論文により、『統要集』の宋版がいかなる形態であるかについては、ほほ明らかとなつた。しかし、本書の撰者、宗永の伝やその編集事情と年時、宋元代における刊行の実状、などに関するては、資料不足のために、依然として不明な要素が少なくない、といううらみをのこしていた。

こうした状況のもとで、筆者は東洋文庫本を閲覧し、このテキストが、これまで断片的な紹介がなされている東福寺本と、まったく同一版であるという確信をることができた。

その後、大東急文庫本をみて、これは容易ならぬ書との印象

をうけたのにひきつづき、内閣文庫所蔵の元版『続集』を調査したところ、このテキストには意外にも、『統要集』の編集や初刊に関する記事が存在し、また、『続集』の編成当初における巻次構成が遺存されるなど、まさに貴重な古刊本であることが判明したのである。その概要是すでに公にしたが、紙幅の制限により、意をつくせないのが気がかりであった。とまれ、この内閣文庫本の存在は、古刊禪籍に対する文献研究の重要な性を、まのあたりに教えてくれる好例であった。

さらに一層その感を強くしたのは、最近、叢山文庫に所蔵される宋版の調査によつてである。該書は東洋文庫本とは別の宋版であり、しかも、これまた新出の諸記事によつて、本書の宋代における刊行状況が、驚くほど頻繁であつた事情が判明したからである。

かくして、現存が知られるすべての宋元版を調査できたいま、本書の書誌に関する総合的な再検討と、その報告を行う義務を感じる。本稿においては、あらためて各版を成立順にとりあげ、そこに存する資料を紹介しながら、本書の成立、諸版の刊行、それらの系統、などの書誌に関する総合的な整理を意図するものである。

二、前集の東洋文庫本・東福寺本

『門統要集』の便宜的な呼称である。

前集の東洋文庫本（以下、東洋本）についての書誌的な紹介は、すでに柳田・石井両氏の論文にくわしい。したがって、ここではできるだけ重複をさけ、おもに両氏のふれない部分や問題点を中心に、のべることとしたい。

東洋本は、全一〇卷一〇冊の小型本で、南宋期の淳熙六年（一一七九）五月の跋を有する宋版である。完本にちかく、明らかな欠丁は、卷四の第五紙裏の半葉のみである。補写はないものの、全体に文字の磨滅がみられ、かなりの後刷本である。匡郭は左右双边、有界、版式は毎半葉一〇行、一行二〇字、となっている。

各冊の中間にあたり、「普門院」の蔵書印が捺されている。この特徴ある字形の蔵書印は、京都東福寺の所蔵にかかる宋版『太平御覽¹⁰』（国宝）、宋代写『徑山仏鑑禪師行狀¹¹』、宋版『四明十義書¹²』（共に重文）、などに捺されている印と同じとみられるから、東洋本はもと東福寺普門院の所蔵であったことが知られる。

ところで、東洋本全体の構成は、つぎのとおりである。

- 1 鄭謨の序、紹興五年
- 2 総目録（全巻の簡目）
- 3 目録（各巻の巻首、巻別細目）
- 4 本文（巻一～一〇）

5 皇子魏王の跋、淳熙六年

右のうち、1は紹興五年（一一三五）に、思鑒禅人が四明で『統要集』を重刊したときの序文であり、5はさらにこれを淳熙六年（一一七九）に重開した際の跋文である。これらの二文は、他のいずれの現存テキストにも文献中にもみられず、本版のみに存する唯一の貴重資料であるから、以下、つづいて掲載しておこう。

統要序

達磨不西來、東土未嘗欠少。若曰教外別伝、端是強生節目、不立文字、文采已彰、直指人心、早是迂曲了也、見性成仏、拋沙撒土。与麼說話、若約衲僧門下、如隔靴抓癢相似。何況被人將。他方此土、咳唾抄劄出來、七花八裂。更有諸方不識好惡老凍臘、於註脚下增添、惣而号曰宗門統要、去道遠矣。然雖如是、把住也、十方諸仏六代祖師、酌然無出氣分。放一線道、且要錦上添花。又是干戈一動、四海塵昏、不有征伐、安能平安哉。諸宗師尽用上將機謀、執□斬馘、戡定禍亂、立致昇平。然其間世喻不能及處、多悞初機、不可亡言。且如秉金剛王寶劍、奮大自在威、權機輪轉、千眼猶迷、諸天罔測。方縱中有奪、奪不収功、殺裏有生、生不受賞。或縱奪逆施、殺活同時、或扶弱抑強、復崇高復下。或拋款結案、復就身打劫、或雷轟電掣、復綿累秤鎗、無你摸索處。故曰、大用現前、不存軌則。已得者視之、可以陶冶性靈、周旋機智、未領解者、可以觀標認月、得鬼忘蹄。切忌狂狗趨塊。上他機境、隨語生解、分別識情、非徒無益、転更汨沒苦海、流浪風塵、却要做箇平常無事人、了不可得。若能將識情解會、弃擲靜盡、於非思

量絶分別処、著些精彩、観得破截断意根、倒転舌頭、天下老和尚、不奈你何。非惟自利、堪与人天為師、然後知宗門統要、功不浪施。噫此是甚麼人行履処、豈可容易ト度、便能成辦。思鑒禪人、憫其兵火之余、無伝於世。乃深懲懇、以結衆緣。所冀、冷灰中忽然豆暴、蹤出一人半人、報答仏祖深思。求叙於本然居士鄭謐云。

紹興五年十一月三日

寓丹丘天寧六和堂書

清淨寂滅、釈之体也。善心無方、釈之用也。吾夫子之贊易曰、無思也無為也。寂然不動、感而遂通天下之故、豈非能定、然後能應

歟。儒釈之教雖異、極其理性之妙、蓋亦殊塗而同歸。余於內典、嘗究心焉、非談空而廢務也。以此洗心滌慮、達於事變焉耳。釈典之伝於世、充棟汗牛、而統要之作、撮其精義。四明所刊、歲久漫滅、命工新之、以寿其伝。庶有補於後學之万一云。

淳熙六年五月既望

皇子魏王跋

を重刊した人であることが知られる。

東洋本のテキストは、この四明本の『統要集』を、淳熙六年に魏王の跋を付して改刻した際のプリントにほかならないが、注目すべきことは、同じ思鑒禪人による四明本の『伝燈錄』が、またも同時期に魏王の跋をえて開版されているという関係である。それは、筆者がかつて紹介した、駒沢大学図書館所蔵の『景德伝燈抄錄』なる古写本の巻末に、淳熙六年の年記をもつ皇子魏王の跋文の概要が寄せられていることによつてのみ、知られる史実である。

皇子魏王は魏慧憲王とも称し、孝宗の子の趙愷（一一四六）一一八〇のことであり、淳熙六年（一一七九）は没する前年にあたる。⁽¹⁴⁾ あたかも、紹興五年からは半世紀に近く、すでに南宋の都にほど近い四明のあたりでは、宏智・真歇・大慧・拙庵・瞎堂・密庵などの禅匠たちが五山に歴住し、五山禅林を中心とする禅界の最盛期を迎えていた。こうした時期に、これらの二書が時處を同じくして刊行されている事実は、五山の界限では、これらを禅籍の双璧として重視していたことを示している。

はじめの序文は、本然居士鄭謐が、丹丘（台州寧海県）の天寧寺六和堂で、思鑒禪人のために書いたものである。思鑒禪人も鄭謐も、遺憾ながら、くわしいことはわからない。ただし、前者は延祐三年（一三一六）刊行の元版『景德伝燈錄』に付録される宏智正覚の疏と、台州軍州事劉棐の後序とによって、ほぼ同期の紹興四年ごろに、これまた四明で『伝燈錄』

宗派直下図」が、全体のどこにもみあたらぬからであり、第二には、その「目録」に刻される丁数が不自然だからである。

第一の点は、次項で紹介する叡山文庫本も同様であるから、「曹溪宗派直下図」なるものは、もともと別冊であったのかかもしれない。いずれにしても、現存しないことに変りはない。また、第二の点に関しては、東洋本の版心に刻される丁数は、左記のとおりとなつていてある。

1 序 2 目録

1・二 11・三 四～四〇

3 本文（卷一）

（第一冊首） 鄭諶の序文末尾の半葉、及び卷一の巻首半葉
（第二冊尾） 卷二の末尾半葉
（第五冊尾） 魏王の跋文末尾の見開き部分（半葉一枚）

右のような丁数の連続からみると、元来、このプリントには、目録の前にもう一紙が存在していたのではないかと思われる。ただし、これを前記の「直下図」の丁数とみるには、あまりにも少ないから不自然であろう。ここには元来、別の記事があつたとみられ、それは東福寺本の調査によつて判明するはずである。

東福寺本は、周知のとおり、京都東福寺に現存する宋版の五冊本で、国の重要文化財に指定されている。貴重書のためか、該書の閲覧は困難であるが、さいわいにも、毎日新聞社

刊の『重要文化財』一一には、そのうちの四葉の写真が掲載

され、左記の解題が付されているので、その書誌的な概要を知ることができる。（原、左横書き）

宋版宗門統要集 5冊 京都 東福寺 袋綴装 各26.8×15.8cm

南宋時代（第5冊）淳熙6年（1179）刊行跋

宋、宗永が古訓公案等を集録した類書で、本書はその南宋版本。第5冊末に皇子魏王の写刻跋があり、その頃の雕版と認められる。版式左右双边、半葉9行、版心に刻工名がある。⁽¹⁵⁾

また、四葉の写真とは、つぎの箇所である。

小朱 方祐 王寔 朱坦△ 施端 洪昌△ 陳顯 楊淳熙刊本 東福寺
宗門統要集

昌 董明 蔡忠⁽¹⁶⁾

これらの刻工名を、東洋本のそれと照合すると、すべての名をみいだすことができる。とくに、補刻とされる洪昌（巻一—17・18）と朱坦（巻二—23・24）の名が存在することに注目したい。すなわち、原刻のみならず補刻部分の刻工名まで一致する事実は、前述の写真や解題の吻合と相まって、東福寺本は調卷こそ異なるものの、東洋本とまったく同一のプリントであることを立証するものである。

ちなみに、右の刻工名を「宋刊本刻工名表初校⁽¹⁷⁾」によって検索すると、紹興中明州刊本、およびその補修版の『文選』六〇巻の中に、じつに方祐・王寔・施端・楊昌・董明・蔡忠の六名をみいだすことができる。つまり、淳熙版『統要集』の雕造にたずさわった刻工の多くは、明州で開版された『文選』の雕造にも従事していたのである。したがって、開版地の明記されない淳熙版『統要集』も、明州またはその近辺で開版されたものとみてよいであろう。

さて、その淳熙六年に魏王が書いた跋によれば、底本の四明本が漫滅したので新雕したとあるから、当該の淳熙版は、すべて新組みだったのである。にもかかわらず、東洋本は磨滅がいちじるしく、東福寺本と同じ補刻部分を含む。この一致は、本版が何度も版をかさね、まもなく補刻を余儀なくされたこと、つまり、該書の需要がいかに多かったかを如実に

示すものである。

補刻部分をも共通する同一の宋版プリントが、一本も本邦に現存するのは、まさに奇蹟にちかい。東洋本も、もとは東福寺の所蔵であったことから推せば、元来この一本は同時に大陸から将来されたのではないであろうか。いったい、大道一以が文和二年（一一五三）に書いた『普門院經論章疏語錄儒書等目録』中には、該書が三部も著録されている。すなわち、秋函には、

宗門統要一部五冊⁽¹⁸⁾

とあり、また、同じく珍函には、

宗門統要二部各五冊⁽²⁰⁾

とみえるのがそれである。ただし、珍函の記録は一以の筆蹟ではなく、後人による追記であるという。それはともかく、ともに五冊本であるから、東福寺の現存本はこれら的一部であろうが、東洋本とは一致しない。ただし、東洋本は後代の改装であるから、その際に五冊を一〇冊としたとも考えられる。

ともあれ、右の考察によつて、東福寺には一四世紀に宋版の『統要集』が三本以上も伝わっていたのである。もつて、わが中世の禅林における該書への関心の一端をうかがうことができるよう。

II、前集の叢山文庫本

蔵」(右)

有界、左右双辺 (18.9×11.5cm)

毎半葉一〇行、毎行一〇字

やや厚手の唐紙、部分的に裏打

墨書「一」～「十」

白口、黒魚尾、「統要（卷数）」(丁数)、下部

刻工名

なし

あり

なし

朱引

あり（別記）

補写

あり（別記）

刊記

紹興丙寅

蔵書印
各巻末「道可」(朱印陽刻)

なお、本版には、序・跋・刊記・刊語・勧縁刻記など、注目すべき多くの諸記がある一方、かなりの補刻や補写の部分が存するなど、書誌的には複雑な内容をもつテキストである。各冊ごとの紙数と補写部分とを示すと、つぎのとおりである。

卷 冊 一〇卷一〇冊

装 訂 線装袋綴

表 紙 橙色 (24.2×14.6cm)

題 簿 なし、墨書「宗門統要一」(左上)・「咸 天海

第一冊 42 紙 (序文から通し丁数)

第11冊 38 紙 (全冊補写)

第三册 53 紙 (第15・34の二紙は補写)

天海大僧正の蒐集書を著録する『山門藏本目録』によれば、咸号の末尾に

宗門統要唐本 十 (22) 冊

と記載され、また、川瀬一馬氏が『五山版の研究』上巻の解説篇で、かつて宋元版が五山版と誤認されていた例の一つとして、

宗門統要集 (天海旧蔵、宋版)⁽²³⁾

をあげている。これらの記載によつて、かねてから筆者は、天海旧蔵書の多くを所蔵する叢山文庫に、おそらくは該書の古版が現存するものと推察していた。

期待にそぐわず、新装成った叢山文庫の天海蔵に、『宗門統要集』の宋槧本が現存していた。しかも、それは東洋本よりも古い別版で、まさしく天下唯一版の稀観書であった。

叢山文庫本（以下、叢山本）については、従来まったく紹介されていないと思われるので、ここにまず書誌的な事項を、ややくわしく記載しておこう。

第四冊 43紙（第21紙は補写）

7 刊記（卷三～九、各巻末） 紹興丙寅

第五冊 43紙

8 刊語 咸淳八年、淨日識

第六冊 44紙

9 跋 淳祐丁未、淨徹撰

第七冊

10 劍縁者刻記

第八冊 53紙

右のうち、1は明蔵本以下の流布本にもみられるが、本版

第九冊 43紙（卷首の記から通し丁数、第42紙は補写）

は現存最古の文であるのみならず、その題名と署名に相違がある。また、2と5は本版と内閣文庫本『続集』だけに含まれるが、本版の方が古く、かつ、文字に若干の異同がある。

第十冊 38紙（本文36紙、跋は別丁で2紙）
右において、本文部分の紙数は東洋本と同じであるが、記載される内容にはわずかな相違があり、それは後述する。補

さらに、7以下の記事は、本版独特の刻記ばかりである。

写の部分は、第二冊は邦人による中世の筆蹟である。補写の四紙は、別の同一者による筆蹟である。各巻末尾に捺される「道可」の旧蔵印については、目下のところ不明である。

しかし、補写の状況からみて、本書は中世初めごろには、すでに本邦に将来させていたことを察せしめる。

つぎに、叢山本全体の構成内容を順序にしたがって記載するが、つぎのとおりである。

紹興丙寅廬山・庵重刊

紹興丙寅、すなわち紹興一六年（一一四六）は、さきの淳熙六年（一一七九）へ跋▼刊である東洋本をさかのぼること三十三年の古さである。はたしてこのテキストは、紹興一六年の刊本なのであろうか。

これを決すべき資料として、卷一〇の本文につづき、同一紙に刻される左記の刊語がある。この記事は、すこぶる重要な刻記であるから、以下、意訳と原文とをつづけて記載しよう。

- 1 莆田新開宗門統要序 紹興三年、耿延禧撰
- 2 宗門統要序 元祐八年、姚莘撰
- 3 宗門統要目録（卷一～一〇の簡目）
- 4 本文（卷一～八、各巻首の目録と本文）
- 5 宗門統要集記 元符庚辰、宗永撰
- 6 本文（卷九）一〇、各巻首の目録と本文）

木を用いて庵で開版をした。のちに庵が廢され、版木は山中に置かれたが、歳月が久しい間に半ばは散失した。わずかに残った版木も、また半数は腐朽したり磨滅してしまった。いま、磨滅した部分は補修し、腐朽した部分はとりかえ、散失した部分は新たに雕造した。本書が刊行されて、広く伝わることを切に願う。咸淳八年壬申（一二七二）の春、廬山円通寺の住持、淨日がしるす。

紹興丙寅、^レ庵劉居士、刊是版于庵。庵廢而版歸山中、歳月既久、散失者半。僅存而腐敗漫滅者又半。今漫滅者修之、腐敗者易之、散失者新之。庶寿斯本、以広其伝云。咸淳八年壬申春、廬山円通住持比丘 淨日識。

淳祐丁未中秋

住山 淨微跋

およそ、宋代における禅籍の重版について、その版木の状況をこれほどくわしく語る刻記は、きわめて稀であろう。そ

の意味では、この刊語はひとり『統要集』だけでなく、宋版一般の書誌的研究に対しても、貴重な事例を提供するものといえよう。

ともあれ、右の刊語によつて、叢山本は咸淳八年に廬山円通庵の住持淨日が、紹興一六年に^レ庵で重刊された際の版木を主として用い、その欠損部分を補刻して刊行したプリントであることがたしかめられる。ところが、ややこしいことは、その間に、さらに一回の重版がなされたらしい。それは巻末に付せられるつきの跋文と勧縁者の刻記によって知られない。したがつて、淳祐七年の時点では、全面的に紹興一六

るのである。なお、これらの刻記は改紙ではじまり、行書体で刻されている。

景德伝燈・宗門統要、諸祖所談妙偈。四家語、極精□。僧宝伝、具載因縁。林間錄、千古佳話。言言字字、皆仏祖機要。非作略通天者、不能領話、非逸群過量者、不能成機。解成機能領話者、其誰歟。昔日、無相劉居士、作唱刊之。刊前意図不朽、年代深遠、零落叢林。賴遇練使劉公、夙乘願力、自捨俸資、繼和補之。刊後未円公案、□已周全共、結增上縁、流通正法。眼有不執文字、不離文字者、着得一隻眼話則、知從上仏祖言教、如意得水、以虎靠山。不然、若將閑學解、埋沒祖師心。

勸縁白雲西堂慈応 同幹縁比丘了悟

右の跋文に記される年時は、淳祐七年（一二四七）であるから、さきの咸淳八年の刊語に先だつこと二五年である。文中、『統要集』を『景德伝燈錄』と併記し、『四家語』『僧宝伝』『林間錄』などに対する寸評も、たしかに注目される。

ただ、当面の重版に関しては、昔日における無相劉居士の意図を継いで練使劉公がこれを補つたとあるものの、補刻についてはなにも語らぬ。いったい、このときに補刻がなされていれば、さきの刊語がふれるはずなのに、まったく関説をみない。したがつて、淳祐七年の時点では、全面的に紹興一六

年の版木を用い、新たに淨徹の跋のみを付した後刷本であつたとみられる。そののち、急激に版木の損傷が進んだので、さきの刊語にいう大巾な補刻が、咸淳八年になされたのである。

なお、廬山の・庵については、民国二二年に吳宗慈撰の『廬山志』⁽²⁴⁾では不明であり、住山淨徹・白雲西堂慈応・了悟のいずれも僧伝の上に徵することはできないが、みな廬山に縁の深い禪者であつたとみられる。とくに淨徹は、咸淳八年のときの円通庵争田に先だつ住持ではなかつたかと思われる。

かくして、叢山本における原刻と補刻との関係を念頭におきながら、あらためてテキスト全体を精査すると、なるほど、原刻部分は文字の磨滅がいちじるしく、多くの補刻がみられる。補刻の部分は、巻を追つて多くなっている。いま、明らかに補刻とわかる丁数をあげると、左記のとおりである。

(数字は丁数)

第三冊	第四冊	第五冊	第六冊	第七冊	第八冊
10、51、		15	18	13、	49、
37、52		{ 20	(部分)	14、	12、50、
38		21	{ 18	53	26、
		{ 33	{ 21	28、	27
		35	{ 23		(部分)、
		{ 26	{ 29		29、
		41	{ 36		{ 35、
		{ 45	{ 40、		40、
			{ 41		41

△補刻部分▽

第九冊	$5 \cdot 6$ (部分)、7~10、13、14、17~22、34、40、43 第十冊 1 (部分)、7、8、11~15、17~19、21、22、 31、35~36
右にあげた補刻丁数の合計は、九六紙によよぶ。この分量	は、全体の丁数四四三紙の $\frac{1}{5}$ 強であるから、さきの刊語に照 らせば、実際の補刻部分は、もう少し多いのかもしねない。 ちなみに、本版にみえる刻工名中、解読できたものを、巻 数と丁数の別に示しておこう。

顯	(三—	51、	52、	四—	17、	六—	22、	23、	七—	13、	14、	29、	30、	36	
	19、	45、	49、	50、	九—	17	{ 20、	一〇—	35、	曆	(四—	37、	38、	五	
	19、	20、	六—	21、	24、	25、	27	{ 33、	35、	七—	23	{ 26、	八—	33、	
	9—	7	{ 10、	13、	14、	34、	40、	一〇—	18、	19、	31、	中才	(六—	26、	
	7—	19	{ 21、	42	{ 44、	八—	11、	12、	31、	32、	40、	41、	九—	21、	
一〇—	7、	8、	13	{ 15、	17、	22)、陳	(八—	26、	29、	34、	一〇—	22、	21、	26、

長沢氏の「宋刊本刻工名表初稿」に照らすと、右の刻工中、最初の閔昱だけが、静嘉堂文庫の所蔵にかかる宋版『小畜外集』の刻工名と合致する。⁽²⁵⁾ この人は、叡山本『統要集』では卷一の尾題の下に、「開封閔昱刀」と刻されていて、紹興年間にはすでに金国の統治下におかれた北宋の都、開封の出身地名をあえて冠している。多分、叡山本の雕造はこの人が中心をなしたのであろう。

さて、以上によつて、叡山本は現存最古刊本であるのみならず、廬山における三回にわたる開版の状況をも伝える貴重なテキストであることが明らかとなつた。ところが、前掲のようすに、紹興丙寅の刊記も「重刊」とあって、もちろん該書の初刻ではない。その底本となつたものは、卷首におかれる耿延禧の序が書かれた、紹興三年の刊本であろう。

耿延禧の序文は、明藏本以降の流布本にも保存されているから、すでに一般に知られている。しかし、叡山本は最古のテキストであり、しかも、重要な点で異同があるから、以下、内閣本と明藏万曆本で対校しておこう。

^{*} 蒲田新開宗門統要序

竜岡閣直学士左朝請郎提挙江州太平觀耿延禧撰

大宝積經云、如來所演八万四千法藏声教、皆名為文、諸離一切言

音文字、理不可說、是名為義。又云、若諸經中文句廣博、能令衆生心意踴躍、名不了義。若有宣說文句及心、皆同灰燼、是名了義。

大涅槃經云、若人聞說大涅槃一字一句、不作字相、不作句相、不作聞相、不作仏相、不作說相、如是之義者、名無相相。以是觀之、諸仏以無說說、其來久矣。達磨西來、重為拈出、為其拘滯於教相也。則曰、教外別伝、不立文字、為其委曲於情解也。則曰、直指人心、見性成仏、是故答第一義諦。曰廓然無聖、則憐其不契而渡江。慧可再拜、依位而立、則以為得髓而伝法。是豈與諸仏有異邪。蓋所謂當機覲面提、覲面當機、疾如石火電光、擬議即差、念起情生、斯為閔鎖耳。故余嘗論之、如來老婆心切、乃曰、正法眼藏分付摩訶迦葉、臨濟丈夫氣槩、乃曰、正法眼藏、向遮暗驢辺滅却。是二老子、同曲異調若聞。余是說言語及心、皆同灰燼、不作一字一句及諸名相、則如來禪祖師禪。庶幾、意領而神解乎。宗門統要、首以西竺諸仏、繼以東震諸祖、及前世宗匠。所以、指導後學、與後世作家。所以、抉剔前人者、合為一書、皆出乎文字、而直指人心。學者不可不家有、而日見之。予章李氏、鍼板以伝、兵火之餘、既已煙滅。蒲陽天寧長老慧沢、既伝心宗、復明教意、知如來祖師禪、等無有異。乃命刊行、以垂久遠、求余為序、以冠篇首。昔僧問、祖意教意是同是別。巴陵云、雞寒上樹、鴨寒入水。又問、三教十二分教則不疑、如何是宗門中事。師云、不是衲僧分上事。如何是衲僧分上事。曰、貪觀白浪、失却手橈。若知此者、則三世諸仏無所說、歷代祖師未嘗傳。統要徒集葛藤、居士戲加序引、可付之一笑而已矣。

紹興三年二月

太秀居士序

* 「莆田新」ノ三字、元ハ「莆田重」、明ハ「重」ニ作ル
* 「延禧」ノ二字、元ハ少サク作ル * 諸離—離諸元 * 博

—博元^明 * 踊—踊^明 * 桀—睽^元 * 「作」ノ字、底本ハ磨滅ノタメ^元_明ニヨリ補ウ * 之一是^元_{ナシ}^明 * 苓—答^明邪—耶^元_明 * 賞—嘗^明 * 桀—概^明 * 己—巳^元 * 寶—冠^元_明 * 「問」ノ次ニ「巴陵」ノ二字アリ^明 * 巴—ナシ^明 * 雞—鷄^明 * 入—下^元_明 * 賞—嘗^明 * 「藤」以下ノ八字破損^元 * 三本トモ「己」ニ作ルモ「己」カ * 「月」以下^元ハ破損シ^明ハ「日序」ノ二字アリ * 「太秀居士序」ノ五字ナシ^明

右の序文は、紹興三年（一一三三）に太秀居士耿延禧の撰述にかかり、もと予章の李氏による刊本が兵火で煙滅したために、莆田天寧寺の慧沢が新たに刊行した際の一文である。さきの東洋本には、紹興五年に刊行された四明本の序が付せられていたが、これに先だつこと二年、まったく別箇に南方の莆田（福建省莆田県）でも『統要集』が刊行されていたのである。しかも、流布本では序題に付せられる「重開」の二字が、この宋版では「莆田新開」とあり、これがおそらくは原題名である。また、莆田の地は、本書の編者、宗永の出身地である建谿（福建省建甌県）から遠くないことも注意される。

序文の撰者、耿延禧については、くわしくは不明であるが、肩書きの「提挙江州太平觀」に注目したい。江州太平觀とは、廬山の著名な道觀にほかならない。杭州の洞霄宮や建州の武夷觀など、天下の一二の道觀とともに、この道觀にたいして提挙の官がおかれたのは、熙寧二年（一〇六九）であつた。²⁶

遠く福建の莆田で新開された禅書が、のちに廬山で重刊されるのは、同じ山内の太平觀提挙を任する人の序が付されていたからとみるのは、牽強付会にすぎるであろうか。

いずれにしても、莆田の新開本は、天寧寺慧沢の開版であった。そして、これをさらに遡る祖本は、序文にいう予章の李氏刊行本にほかならない。ただし、目下のところ、天寧寺慧沢も予章の李氏も、ともに他に徵するものがない。黃龍慧南の法嗣に蘄州三角山慧沢がいるが、年代的には苦しく、おそらく別人であろう。従来、『統要集』の成立や初刊の年時が不明であったのは、宗永の伝が知られぬ上に、序跋などによる詮索が、これ以上は不能であつたことによる。

ところが、この叢山本には、これらを知らしめる貴重な資料が含まれている。それは、姚摯の序と宗永の記、の二つであるが、その資料紹介は、さいごの項にまわしたい。

四、続集の内閣文庫本

ここにいう「続集」とは、便宜上、「前集」に対する呼称であり、元代の古林清茂が前集以後の部分を増補し、また前集の部分にも後代禪者の拈提を増補して、新編となしたもの⁽²⁷⁾を指す。知るごとく、流布本はすべて『宗門統要續集』二二卷という体裁をとつてゐる。

ところで、国立公文書館内閣文庫にこの続集の古版が所蔵

かれている」とは、大正三年に刊行された『内閣文庫国書第一二部漢籍目録』の中に、

続集宗門統要十二卷、元版清茂

一(28)

と記載されることにより、古くから知られていた。

ところが、昭和三十一年に発刊された『内閣文庫漢籍分類目録』では、右に記載される「元版」が「明版」と変わり、昭和四六年の改訂版もこれを承け、まったく同じ記載となつてゐる。明版とあれば、明版大藏經（方冊本万曆藏）に含まれる本書はすでに流布本系統であるから、卷数に注意しないかぎり、ことさらに注目すべき対象とはなり難い。これが内閣文庫本（以下、内閣本）がこれまでに注意されなかつた最大の原因と考えられる。

じつは筆者も、内閣本の一二巻という目録の記載は、流布本一二巻の誤記ではないかと推定していた。しかし、実物を閲覧して一驚したのである。本書は、まぎれもなく一二巻本の『続集』であり、流布本では知りえない原初形態を遺存するのみならず、姚莘の前集序、編者宗永の記、古林清茂の続集の跋、という三つの重要な資料をみいだしたからである。もつとも、古林の跋は、すでに大東急文庫本の補写をみていたし、また、姚莘と宗永のものは、のちに叢山本の調査によつて、さらに古いテキストの存在を知つたのであるが、内閣本にみいだした際の驚きは新鮮であつた。

内閣本も、これまでに書誌的な事項は未紹介であるから、以下にややくわしく記載しておこう。

卷 冊	一二巻一〇冊
表 紙	線装袋綴 青色(23.9×14.8cm)
表 紙	なし、墨書「続集宗門統要」
題 簿	左右双辺(19.0×12.4cm)、有界
匡 郭	半葉一〇行、毎行一〇字
行 格	小黒口、上下向い合ひ黒魚尾、「続集要卷」(数)
紙 質	薄手の唐紙、総裏打
版 心	(子数)
刻工名	「思恭刊」(卷一第二丁)
小 口	無記
書 込	あり
朱 墨	点・引共に稀にあり
刊 記	あり(別記)
蔵書印	「昌平坂学問所」(黒印、各冊表紙及び末葉)、 「林氏藏書」(朱印、第二一~一〇各冊首)、「浅草 文庫」「江雲渭樹」(朱印、各冊首)
第一冊	また、全冊の紙数はつきのとおりである。 100紙(卷一~54、卷二~46)
第一冊	72紙(卷三)

第三冊 57 紙（卷四）

第四冊 62 紙（卷五）

第五冊 56 紙（卷六）

第六冊 70 紙（卷七）

第七冊 57 紙（卷八）

第八冊 60 紙（卷九）

第九冊 45 紙（卷十）

第十冊 88 紙（卷十一—69、卷十二—17、補写跋—2）

以上のように、内閣本は第一冊と第一〇冊がそれぞれ二巻ずつを収めるほかは、一巻一冊の調巻となっている。本文に

欠丁は認められず、跋文の一紙だけが補写である、刻工名は、

前記のように卷一の第二二丁版心に「思恭刊」とあるのが唯一

の刻記である。

つぎに、内閣本全巻の内容構成は、左記の順序となっている。

1 続集宗門統要序 延祐庚申、希陵撰

2 莆田重開宗門統要序 紹興三年、耿延禧撰

3 宗門統要集序 元祐八年、姚孳撰

4 続集宗門統要目録（卷一—一二の簡目）

5 本文（卷一—一〇、各巻首の目録と本文）

6 宗門統要集記 元符庚辰、宗永撰

7 本文（卷一一—一二、各巻首の目録と本文）

8 跋 古林清茂撰（補写）

右を一見するだけでも、本版はたんに『続集』の古版といふのみならず、多くの貴重資料を保持していることが知られるよう。中でも、前述のように3と6の記事はとくに重要であるから、その紹介は後に別記することにする。

ついで注目すべき記事は、本版の刊行に直接の関係がある1と8の二つである。まず、延祐庚申（一一〇）の年記をもつ希陵の序文は、すべての流布本にも所載されるが、ここに現存最古の内閣本の本文を掲げ、明藏本（方冊本）で対校してみよう。

續集宗門統要序

徑山興聖万寿禪寺住持沙門 希陵撰

靈鷲拈華之旨、獨付飲光、少林得髓之伝、惟稱可祖。西竺聖師授受、同印乎一心、東土宗派流分、各顯其大用。不歷漸階之次、直躋聖地之帰、自五葉伝芳千燈統焰^{*}、正法眼流通於震旦盛矣哉。其有機緣啓投鍼之契、問答湊激電之馳、伝燈諸錄、載之詳備、統要収亦綸貫耳。是以古林禪師、以透古今眼、具通變機、采後來提唱宗師、統前代統要玄旨。執金鉢而刮衆膜、握寶劍而斷群疑。若不顯竜驥虎驟之機、安知有玉振金声之作。蓋紀實以伝信、非潤色之虛文也。延祐庚申謹序。

* 序題ノ七字「宗門統要續集序」ニツクル * 焰—燄

みるとおり、内閣本と流布本との相違点は、ただ題名の表

記だけにすぎない。しかし、内閣本は目録の題名、および各巻すべての内題・奥題が「続集宗門統要」で統一され、流布本系統の「宗門統要続集」とは表記を異にする。おそらくは、前者が『続集』の原型を遺存するものであろう。

さて、右の序文は、古林が編集した『続集』に対しても付せられた一文にほかならない。撰者の虎谷希陵（一二四七）²⁹（一三二二）は、雪巖祖欽の法を嗣ぎ、のちに徑山万寿寺に住して仏鑑禪師と賜号をうけた名徳であり、古林は、いうまでもなく、元代の禅界を代表する禅匠である。『続集』の成立に、こうした当代一流の禅者たちが関与している事実は、本書に対する江湖の関心高揚に拍車をかけたものと想像される。とともに、もはや前代の前集は忘れ去られるべき運命にあつたことが察しられるのである。

ところで、この『続集』の成立年時について、従来は希陵の序が書かれた延祐七年（一三二〇）ごろと考えられていた。流布本には、この序文とともに馮子振による序が付せられてゐるが、なぜか年記をもたぬ。ところが、内閣本には馮子振の序がないかわりに、巻尾に古林自身の跋が補写されていて、ここに本書編成の年時が明記されているのである。

ここにみえる古林の跋は、本書の流布本ではなく、また、

『古林和尚語錄』五巻、『古林和尚偈頌拾遺』六巻などの中にもみいだすことができない。この内閣本と、次項で紹介す

る大東急文庫所蔵本の中にのみ、それぞれ補写で伝えられる珍貴な逸文とみられる。以下、その全文を内閣本によつて掲げよう。なお、この跋文について補写されている刊記の謄写も、便宜上いっしょに記しておく。

宗門統要集、元符間、建渓沙門永藏主所集也。既統其宗、復会其要故、直指之道、昭著盛世、若揭日月。歷觀元符已前、名師碩德、有大發明、機用嶮絕、一縱一奪、如轉円石於万仞之岡、觀者眩然自失臬。建中靖國・嘉泰之間、統・普二灯之書、務文采以相□、失淳全之大旨。則前所謂嶮絕之機、縱奪之用、□成脫略、曷究指揮。若夫提持綱領、抑揚古今、離文字言說、而使夫学者、直造仏祖不疑之地、此書最為簡要。由是知、永公非苟然也。其書有云、或采摭不尽、俟好事者。予固不揣、遂取元符已後南岳下自十二世至十八世、青原下自十一世至十四世、未有興斯集者、統而集之、二家見録機緣共二百六十一則。至於拈徵代別添入頗多、亦永公之遺意也。總目之曰續集宗門統要。嗟乎、仏祖之道、非閑乎數、盛衰之運、實係乎人。今之緝錄、以補闕文、然臨機垂手、腕頭之力不同、在觀者自宜著眼。淳熙景定已降、遺言廣布、未暇討尋、仍有重於将来者也。書成於泰定改元之冬、明年、湖州道場玉山瑛西堂、指金鎧梓、以壽其伝。懋德豐功、當與此錄同不朽也。金陵保寧禪寺嗣祖沙門清茂書。

東嘉謝君明刊

右の跋文によつて、新たに判明した重要事項を要約すると、つぎの四点である。

一、前集の編者、宗永は蔵主の役職であった。

二、古林は元符年間以後の機縁二六一則を増補し、『続集』を編成した。

三、『続集』の成立は泰定元年（一一三二四）の冬であり、書名は『続集宗門統要』であった。

四、『続集』は、成立の翌泰定二年（一一三二五）に湖州道場寺の玉山瑛西堂によって刊行された。

以上の四点のうち、第二の二六一則という古林の明言には注意を要する。なぜならば、内閣本の増補部分の則数は、南岳下二二則、青原下四七則、計二五九則であり、流布本も同じである。流布本に付せられる馮子振の序も、これに等しい。ひとり古林自身の跋文だけが二則多いのは、なぜなのであらうか。

この問題は難解であるが、『続集』の成立年時については、希陵の序がいう延祐七年（一一三二〇）と、古林自身がのべる泰定元年（一一三二四）という四年の差異に、関係してくるのではないか。であるうか。

この四年の歳月は、刊行の準備期間などであつたろうが、その間に本文内容に推論が加わり、若干の変動があつたとしても不思議はない。おそらくは、古林の跋まで定稿化した段階で、本文に二則の削減がなされたのであらう。

いったい、内閣本は刊行当時、古林の跋を付していたので

あらうか。これを知るべき鍵は、内閣本に補写される古林の跋のつぎに、同じく補写されている「東嘉謝君明刊」の六字である。あたかも、「刊」を「梨」としただけのほぼ同じ六字が、内閣本卷一〇の末尾に、ただ一ヶ所だけ刻記されているのである。謝君明は不明な人であり、あるいは刻工名かも知れぬが、同一名の吻合によって、元来、古林の跋は内閣本と同一の刊本に存在したことが確認されるのである。

かくして、『続集』の成立は、古林自身の明記する泰定元年とすべきであり、初刊はその翌年の泰定二年（一一三二五）であった。内閣本の卷一と卷一二の末尾には、とくに小界をつくり、そこには

道場禪寺著旧比
丘懷瑛施財刊板

の二行が刻記され、その他の各巻末にも、

比丘懷瑛
施財刊板

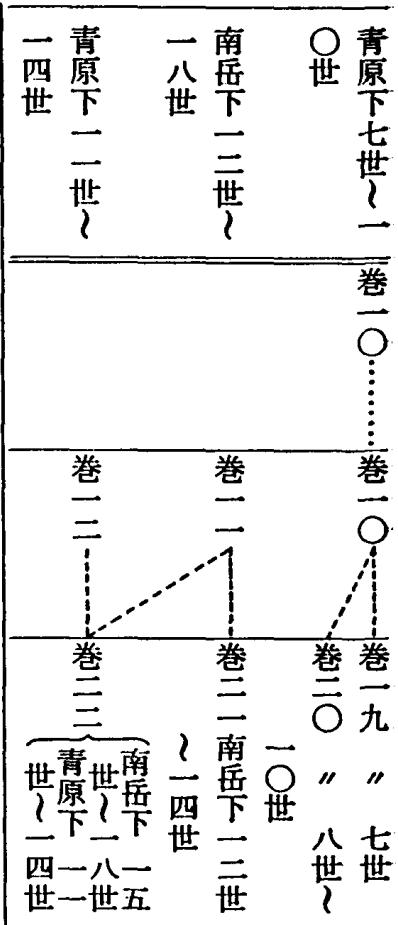
の八字が小界中に刻されている。すなわち、『続集』は湖州道場寺の玉山懷瑛西堂の施財によって、道場寺からはじめて刊行されたのであり、古林の跋はここに付されていたのである。内閣本こそは、その現存唯一本と認むべき稀書にほかなりない。

おなじ道場山の禪幽庵からは、延祐三年（一三一六）に有名な『景德伝燈錄』の元版を刊行している。すなわち、さきにみた紹興の四明本、および淳熙の魏王本について、三たび『伝燈錄』と『統要集』の同地域同時期における刊行が、ここに知られるのである。この事実は、これら二書の宋元代禪界における同等の地位と評価とを示すものであり、禪籍の刊行史上、特筆されなければならない。

ところで、内閣本に馮子振の序が存在しないのは、なぜであろうか。馮子振は元朝の著名人であり、その序文は、内容からして、古林の『統集』が開版された際の撰述とみられる。文中にいう『統集』の則数が実情と一致すること、さきにのべたとおりである。したがって、かりに内閣本がこの序を欠落したのではなければ、『統集』の元版には別版が存在したことを示唆するものである。この点については、次項で問題にしたい。

さて、つぎに注目すべきは、内閣本の卷次編成である。さきにのべたように、内閣本は、前集の部分については拈提の語句こそ増補しているが、調卷は前集を踏襲している。これが『統集』の原型であり、流布本では知りえない特徴である。いま、東洋本・叡山本の宋版と、内閣本（元版）、明藏本（万曆版）、の三者を調卷別に対照すると、つぎのようになる。

項 目	版 別	前 集		統 集	
		宋版、 (東洋本、 叡山本)	元版、 (内閣本)	明版、 (明藏万曆版)	元版、 (内閣本)
西天二八祖・東土六祖		卷一	卷一	卷一	卷一
四祖下し六祖下		卷二	卷二	卷二	卷二
南岳・南岳下一世し二世		卷三	卷三	卷三	卷三
南岳下三世					
南岳下四世		卷四	卷四	卷四	卷四
南岳下五世し一世		卷五	卷五	卷五	卷五
南岳下六世		卷六	卷六	卷六	卷六
南岳下七世		卷七	卷七	卷七	卷七
南岳下八世		卷八	卷八	卷八	卷八
青原下九世		卷九	卷九	卷九	卷九
青原下八世					
青原下七世					
青原下六世					



右の表によつて、左記の諸点を指摘することができる。

- 一、前集の調卷は、『景德伝燈錄』のそれに対応している。
- 二、続集の元版は、公案の本則部分については、卷末に二卷を加上したにすぎない。

三、続集の明版は、元版を全面的に細分化し、前集や元版の形態を不明瞭にしている。

「続」の一字を付して区別し、全体の調卷をそのままとしたのは、こうした宗永の編集意図を熟知し、それを尊重したためのはからいであつた。

ところが、時代が移り、明蔵本にいたつては、調卷はまつたく便宜的に細分化され、前集の意図はおよそ不明瞭と化した。とくに、さいごの卷二二に南岳・青原の両系統を收めるなどは、単に分量的な理由にすぎず、すこぶる学問的な配慮を欠くものといえる。

以上によつて、内閣本の貴重性はいつそう明らかとなつた。さいごに、このテキストの伝承経路についてふれておこう。とはいへ、内閣本には識語などはみられず、手がかりは前記四つの蔵書印だけである。

四印中、「浅草文庫」は、内閣文庫に吸收される以前、浅草蔵前にあつた書籍館の名で、昌平坂学問所の蔵書を基幹とする。⁽³²⁾ 「昌平坂学問所」「林氏蔵書」の旧蔵印は、本書の来歴を示し、「紅雲渭樹」の朱印こそは林羅山の蔵書印であり、これを卷首に捺す書籍は羅山の旧蔵書といわれる。⁽³³⁾

すなわち、内閣本『続集宗門統要』一二巻は、かつて林羅山（一五八三～一六五七）の旧蔵書であった。かれは文禄四年（一五九五）に一三歳で京都建仁寺に投じ、仏儒の典籍を学んで以来、生涯を通じて五山禅門との交流は密であった。

その閲覧記録や文集・詩集の中には、そうした関係を伝える

資料がすくなくない。したがつて、内閣本は、かれが五山禪門あたりから入手したものと思われる。

一方、大陸でも元版とみられる『続集』一二巻本が、明末まで存在していた記録がある。それは、明末における紹興の蔵書家、江西右参祁承燦の自撰蔵書目録である『澹生堂藏書目』、釈家、宗旨の項に、

宗門統要続集十二巻五冊(ママ)
元釈宗永集
清茂編

とあるのがそれである。この蔵書は、のちの兵乱で散逸したらしいが、大陸で現存が知られぬ以上、注目に価しよう。ただし、これが内閣本と同一版であるか、または次項でのべる別版であるかは、遺憾ながら不明である。

五、正統零本の大東急文庫本

東京の五島美術館にある大東急記念文庫には、『統要集』

の正統各零本の寄せ合いで三冊が所蔵されるにすぎないが、意外にもテキスト的にはすこぶる重要であり、これをないがしろにすることはできない。いつた、該書については、比較的に古くから紹介がなされてはいる。しかし、いずれも簡に過ぎ、また誤りがあるなど、テキスト研究の上からは不備であるから、ここにあらためてくわしい紹介と検討をくわえておく。

宗門統要集 宗門統要 卷七 写本
卷九 写本 一冊三冊 久原文庫

五山版 宗門統要第七ノ末ニ 鼎州丁 慈覚 施財、黃景純
勸成、医博熊 文政 勸成、鄱陽比丘 慧允 勾当、統宗門統
要第九ノ末 比丘懷瑛施財刊板(38)

その後まもなく、該書は大東急に移管されたようであるが、下つて昭和三一年に刊行された『大東急文庫貴重書解題』には、現存三冊本に対し、以下の解題がなされる。

宗門統要集 宋刊 (零本)三冊 一九三

宋刊。宋宗永集、清茂統集。卷七の一冊は五山版に似てゐるかの如くで、特に料紙は和紙を思はせるものがあるが、宋版で、版心に刻工名(信・慶(慶刀)・希・七・土)(虫損で判読し難)が見える。左右双边、毎半葉十行二十字。匡郭内、縦六寸二分五厘、横三寸六分五厘。版心「統要(数)」(丁数)。虫損があり、裏打改装を行つてはいるが、摺刷はよく、初印にちかい。卷末に「鼎州丁 慈覚 施財」「黃景純 勸成」「医博熊 文政勸成」「鄱陽比丘 慧允 勾当」の刊記がある。他の統集卷

まず、大東急記念文庫蔵本(以下、大東急本)は、かつてはこの文庫蔵書の骨子をなす京都久原文庫の所蔵であつた。大正七年一一月三日、府立京都図書館を会場として行なわれた第四回大蔵会において、該書三冊は久原文庫から出品されている。その際の展観目録をみると、以下の簡単な解題がなされている。

第九は同版式で巻末に比丘懷瑛施財刊板」の木記が見えるが、版心に刻工名はない。これも摺刷よろしく初印であらう。巻十至十二の一冊は江戸中期の補写にかかる。各冊首には朱印記を捺すが、墨消にしてある。⁽³⁹⁾

筆者がこの大東急本を閲覧調査したところによれば、久原文庫時代の解題が前集巻七の一冊を五山版、続集写本の一冊を巻十、とするのはともに誤りであつて、大東急本の解題が、それぞれ宋版、巻十・十二、と訂正していることが知られる。ただし、後者の「巻十至十二」とするのは、實際には巻一を欠いているから、厳密には正しくない。『新纂禅籍目録』⁽⁴⁰⁾が大東急本を南北朝刊（五山版）の端一冊と記載するのはむろん誤りであり、近年の石井氏による紹介も、また厳密ではない。⁽⁴¹⁾

さて、大東急本の現状は、上・中・下の題簽が付され、三冊が一帙に収められている。以下にのべるよう、上冊は現存唯一冊の宋版であり、中冊は元版、下冊は元版からの贋写である。これら三冊の調卷と組織内容は、左記のとおりである。

〔上 冊〕—宋版—

前集、巻七

1、目録・本文
2、巻末刻記

〔中 冊〕—元版—

続集、巻九

1、目録・本文（七丁欠）

2、刊記

〔下 冊〕—補写—

続集、巻一〇

1、目録・本文

2、巻末刊記

続集、巻一二

1、目録・本文

2、跋（吉林清茂撰）

この三冊を、簡単なものから検討しよう。まず、中冊の続集巻九なる一冊は、前項で紹介した内閣本巻九の一冊と全くである。本文の版式・行格・刊記はもちろん、刻字体のすべてにわたつて完全に一致するから、同版の元版である。ただし、全紙の調冊がかなり乱れ、欠丁もある。すなわち、各紙の綴り順の現状は、1～13、17～42、15、16、43、54、44～47、55～60であり、本来の全紙六〇紙中、七紙が欠丁となつていて。とまれ、この一冊は零本ながら、内閣文庫以外に現存が確認される唯一の同版である。

つぎに、下冊は全文補写ながら、実は重要な一冊である。巻一〇のつぎに巻一二が接続する調冊であり、なぜか巻一一

を欠く。すべて同一手であることに注意しておこう。ところで、本冊の本文内容は、これも内閣本『続集』と一致するから、『続集』にもとづく謄写である。しかし、全体を内閣本と対比すると、卷末の諸記事に関して、五つの重要な相違点がみられるのである。これらの相違点を、両者対照して示すと、つぎのとおりである。

相違点	内閣本（元版）	大東急本（謄写）
1 卷一〇巻末 刊記	「比丘懷瑛施財 刊板」 二紙アリ	「四明大慈禪寺住持比丘施財 命工重刊此板留帰根塔」 ナシ
2 同、宗永の 記	「道場禪寺耆旧 比丘懷瑛施財刊 板」	ナシ
3 卷一二巻末 刊記	半葉八行、毎行 一三字（補写）	半葉四行、毎行八字（行書体）
4 同、跋の行 格	ナシ	ナシ
5 同、跋文末 の刻記	「東嘉謝君明刊」 （補写）	

右の相違点によつて、大東急本の該冊が底本としたものは、意外にもこれまでまったく知られぬ四明大慈寺刊本であつたことが判明する。前述のように、内閣本は古林の跋を有する『続集』の初刻本であつた。したがつて、これと卷次編成や行格を同じくする幻の四明大慈寺本は、この初刻本にもとづ

く重刊であつたにちがいない。

あたかも、大きな行書体で書かれる大東急本の古林跋は、内閣本のそれにくらべて明らかに原型を遺存している。つまり、この体裁こそは、初刻本・重刊本に等しく刻されていたあざやかな筆蹟を示すものである。

かくして、大慈寺本なるものは、湖州道場寺刊行の初刻本を、おなじ浙江の四明大慈寺で重刊した一本であつた。この寺は、宋元代には多く大慧派と虎丘派の禪者が居住し、その地理的関係からも、『続集』の重版にはふさわしい禅苑であった。重版の時期は明確を欠くが、明版とは巻数を異にすること、明版以後の流布本に存在する序文の撰者、馮子振が元代の人であること、元末の至正二五年（一三六五）に近くの太白山祇陀庵から『景德伝燈錄』が重刊されていること、などによつて、おそらくは元末であつたろうと推定される。

『伝燈錄』の祇陀庵重刊本は、延祐三年（一三一六）に湖州道場山禪幽庵から刊行された新開本の重版であつた。したがつて、過去三度にわたる『伝燈錄』との同時期・同地の刊行という傾向が知られる『統要集』が、四たび同地の四明から同時に重刊されるのはけつして不思議ではあるまい。そして、この重刊本にはじめて登場したのが馮子振の序ではなかつたであろうか。この序文については、次の項で問題にしよう。なお、大東急本卷一〇の巻末に宗永の「記」がみられな

いのは、すでに大慈寺本で省かれていたことを示唆する。

『続集』の基本的性格からみて、公案や拈提の増補部分が重要なのであって、もはや前集の編集意図をいう宗永の記は必要とされなくなつたのである。

さいごに、大東急本の中で最大の史料価値をもつ上冊について検討しよう。この一冊については、さきに引く二つの解題のいうように、前集卷七の零本である。大東急文庫の解題は宋版と明記する。

筆者のみるところ、該冊は古色蒼然たる良質の用紙に精刻鮮明な摺刷であり、大らかで飾りけのない刻字体は、あたかも福州版大藏經のそれにも似て、まさしく宋版そのものである。しかも、このプリントは、東洋本・叢山本のいずれとも異なる別版である。版式こそ叢山本に近似しているが、刻工名や巻末刻記の相違は決定的である。したがつて、この宋版一冊は、前述した三回におよぶ廬山刊行本の、どの版にも該当しないと思われる。

その他の宋代刊行書として知りうるものは、すでにふれたようすに、序文だけで知られる紹興三年刊行の莆田本、同五年刊の四明本、および、前者のもとづく予章の李氏刊行本、などであつた。いつたい、大東急本はこれらのうち、どれかの版に該当するのだろうか。

これを知るべき手がかりは、大東急本の巻七にみられる欠

筆・刻工名・巻末刻記などである。しかし、欠筆は「玄」「朗」「弘」などを欠く程度では、年代推定の基準にはならない。また、刻工名も、前掲の解題があげる信・慶・希・七士のほかに、「二」「子□」などがみえるが、いずれも簡に過ぎて、惜しむらくは資料性にとぼしい。残るは巻末刻記であり、それは左記の四行である。

鼎州丁

慈覺施財

黃

景純勸成

医博熊

文政勸成

鄱陽比丘

慧允勾當

いうまでもなく、この宋版は、ここに刻される四者の力によつて開版された一本であろう。ところが、彼等四名については、遺憾ながらまったく不明である。鼎州や鄱陽に関する地方誌類、僧伝、医師伝などのいずれにも、四者の名をみいだすことができないのである。そこで、鼎州と鄱陽の地理に着目してみよう。

なるほど、鼎州（湖南省常徳県）と鄱陽（江西省鄱陽県）とは遠くへだたつてゐる。それでは、前記の宋版三本の開版地である予章・莆田・四明、などとの関係はどうか。まず、莆田と四明は鼎州・鄱陽のいずれからも、はるかに遠隔の地である。ところが、予章（江西省南昌県）は、鄱陽湖をはさんで鄱陽と対峙し、水路でも陸路でもさしたる距離ではない。そし

て、この二地点と鼎州とは、距離こそへだたっているが、鄱陽湖—長江—洞庭湖という水路を結ぶと、意外にもみごとに結びついてくるではないか。大陸における水路が重要な交通路線であることは、古今を問わない。

いつた、予章の李氏刊行本は、おそらく前集の初版本である。そして、後述するように、前集は大渦山で編集されているが、この大渦山と鼎州は、広大な大陸にあっては指呼の距離といってよい。また一方、鼎州なる地名は、宋代では大中祥符五年から乾道元年までの間に呼称されたといわれるから、大東急本が乾道元年（一一六五）以前の古版であることの証左となる。

このように、地名や年代的な関連から推定すると、大東急本卷七は莆田本や四明本の宋版を一挙に凌駕して、これらの祖本とみられる予章李氏の刊行本そのものではないかと思われる。おそらく勾当僧の慧允は編者宗永と繋密な関係にある揚岐派の人であり、予章の李氏と宗永に帰依する鼎州の三者との間を奔走して成ったのが、前集の初刻本であったのではないだろうか。

もしそうであれば、この零本一冊は現存する『統要集』の最古版であり、かつ、稀少価値を有する北宋版の遺品ということになろう。勧成・勾当などの役職名も、北宋版大藏經のそれに準ずる古い呼称である。とまれ、大東急本三冊は、い

ずれも『統要集』正統の古版研究の上で、間隙を埋めてくれる貴重資料といえるのである。

いつた、上中下三冊一帙とされる現状の装訂は、久原文庫時代よりもかなり古く、上冊の表紙裏にみられる墨書きによって、文化五年（一八〇八）であつたことが知られる。

此冊今缺本三巻耳

文化五辰六月 改表皮了

このときは、すでに永らく零本三冊として伝わっていたものの表紙や帙だけを改装したのであらう。三冊の各冊首部には、かつて陽刻の朱印が捺されていたが、いずれも墨で消されている。ところが、下冊卷一二の首部には、それが一つだけ遺されていた。全冊中の中間であるため、消去者が気づかなかつたのであらう。文字は、「靈雲院」の古印三字であった。いうまでもなく、この寺はさきの普門院とともに、京都東福寺の著名な塔頭の名であり、古版禪籍では、宋版『仏法大明錄』（国の重文）の所蔵者として知られる。

かくして、この零本三冊は、かつては靈雲院の所蔵であったことを知る。その混成の経緯は知るよしもないが、東福寺一門にあって、『統要集』の往古における依用のさまを、これまたものがたつてている。

六、続集の流布本系

元代に古林の編んだ『続集』が世におこなわれてからは、もはや前集の開版がなされた形跡はない。したがって、流布本といえば、『続集』に限定される。しかも、明代以降の刊行状況をみると、いずれも蔵経中の入蔵書としてのみ開版され、単行の記録をみいだすことができない。これは、本書の書誌における大きな特徴である。

ところで、『続集』を含む蔵経は、南北の明藏・万曆藏・黃檗藏・縮藏・卍藏、の六種であって、清代の竜藏やわが天海藏には含まれていない。最初の入蔵は南藏であり、『大明三藏聖教南藏目録』によれば、本書には漢と惠の函号が与えられている。

漢九卷一百八十
五張尾半二張
惠十九張

宗門統要續集

また、一方の『大明三藏聖教北藏目録』には、扶・傾・綺の三函中、『六祖大師法寶壇經』と『昭覺禪師語錄』との間にはさまれて、

宗門統要續集二十卷今作

と記載されている。ここで注目されるのは、合計一〇卷、または一一卷とされる巻数である。今日、われわれが容易にみられる明藏は、いわゆる方冊の万曆藏であるが、この万曆藏

本は二二卷である。すると、三本の明藏本のあいだには、一巻ずつの増加がなされているわけである。

総じて、南北両藏についていえば、わが国の所蔵はきわめて稀であり、したがって研究も容易ではない。大陸には多くの所蔵者があるが、調査報告は曉天の星に等しい。わが国では、山口県の快有寺に南藏のセット、竜谷大学に同じく零本の、各所蔵が從来から知られてはいるが、目録や解題は公表されていなかつた。ところが、近年になって立正大学図書館に所蔵される南藏の遺品を、同大学院の野沢佳美氏が精力的に調査され、詳細な目録と解題を公刊47されて、斯界を裨益することとなつた。現在、この南藏は閲覧禁止となつていて、以下の南藏に関する細かな記事は、野沢氏の目録によることを特記しておく。

立正大の南藏は、全五五四帖の零本であつて、万曆一八年（一五九〇）の印造であるといふ。南藏は明初に完成し、明末までの二百年間余にわたつて印造されているから、立正大の蔵経は摺刷は遅くとも南藏の原初形態を保持しているはずである。ここに遺存される禪籍は六種であるが、いま、当面の『宗門統要續集』（以下、立正本）にかぎれば、全二〇卷中、卷一〇・一一・一七・二〇の四巻を欠く一六帖を現存する。このうち、卷一・九の両帖は破損が著しい。初刻の年時は不明であるが、同じ南藏中に含まれる『古尊宿語錄』卷二一が

増補	青原下				南岳下				西天28祖 東土6祖		元版(内閣本)
卷一 二	卷一〇	卷九	卷八	卷七	卷六	卷五	卷四	卷三	卷一 二	卷一	南蔵本(立正本)
17 69	45	60	57	70	56	62	57	72	46 54	[漢一] [漢二]	卷一 卷二
[惠十一] [惠十二]	[惠九] [惠八] [惠七] [惠六] [惠五] [惠四] [惠三] [惠二]	卷一 卷一〇	[漢三] [漢四] [漢五] [漢六] [漢七] [漢八] [漢九] [漢二]	卷一 卷二	卷一 卷二						
卷二〇 欠	卷一九 26	卷一八 欠	卷一七 20	卷一六 20	卷一五 20	卷一四 20	卷一三 20	卷一二 21	卷一〇 欠	15 13 25 16 22 22 27	18 34
卷二二 28	卷二一 34	卷二〇 16	卷一九 16	卷一八 28	卷一七 26	卷一六 26	卷一五 28	卷一四 18	卷一三 18	卷一〇 28	卷一 29
										卷一 37	目次 26 23 14
										万曆蔵本 計	665

永樂二年(一四一四)の刊記をもつことから、ほぼこの前後の刊行と思われる。⁽⁵⁰⁾

ところで、南蔵本以下にみられる調卷の変化について考えてみよう。まず、これを知るために、たがいに版式を異にするのを承知の上で、元版(内閣本)・南蔵本(立正本)・万曆蔵本の各巻別の丁数を調べ、これらをあえて対照したのが上の表である。(算用数字は丁数)

さきに引く『南蔵目録』では、卷一~九の丁数を一八五丁とするのに対して、上の表のように、立正本では破損の巻がありながらすでに一九二丁を数えること、また、卷二の丁数が異常に少ないと、さらに、目録の状態など、若干の問題を残している。とまれ、全体的にいえば、南蔵本は元版に比較して、卷三~六の南岳下と卷七~一〇の青原下の各巻を二分して八巻を増加させ、全一〇巻としたのであろう。増巻の理由は、函量に適応させるための措置であつたと思われる。つぎの北蔵本も、目下みることはできないが、二一巻という巻数は、南蔵本の卷二を分巻したものと思われ、万曆蔵本にいたって、卷一一と一二の部分をさらに一巻開き、全二二巻としたことが推定されるのである。いずれにしても、これらの分巻は便宜的な措置にすぎず、本文や内容に変化のなか

計	665
	404
	584

つたことは、万暦蔵本にみえる南北両蔵との対校によつて知られる。なお、『新纂禪籍目録』には、駒大所蔵の明蔵本二一巻、という記載がみられるが、実物は二二巻の万暦蔵本にほかならない。

こうした経過をへて、万暦蔵本二二巻が成る。この本は各巻末に五行の刊記を刻しているが、そのうちの巻一と巻二二のものを掲げておこう。

(巻一)

刊部郎中金壇于玉立施賀刻此

宗門統要続集第一巻 計字七千四百六十

四箇該銀三両八錢八分

平湖釈在照対長洲徐普書當塗劉懋敷刻

万暦丁未春三月徑山寂照庵識⁵¹

(巻二)

刊部郎中金壇于玉立施賀刻此

宗門統要続集第二十二巻 計字九千六百

五十八個該銀五両零二分

松陵釈宗遠對長洲徐普書江寧吳守倫刻

万暦丁未冬十二月徑山寂照庵識⁵²

右のように、このテキストは、万暦丁未（一六〇七）三月から一二月にかけての雕版であった。文中の「対」とは、やはり各巻末に付される校讎によつて、北蔵本を底本として南蔵本で対校したこと意味する。これらの校讎によれば、南北

両蔵間の文字の異同は僅少であるから、テキストの系統としては、南蔵本—北蔵本—万暦蔵本、と次第したことは明らかである。

かくして、入蔵書で善本という万暦蔵本の性格は、後代の諸本すべての祖本となる最大の要因となつた。万暦蔵本以降の諸本が、巻数をはじめとして、いかに組織内容をよく踏襲しているかを示したのが、つぎの対照表である。（○は存、×は不存）

組織内容	万暦蔵本	黃檗蔵本	縮蔵本	正蔵本
1 総目録	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			
2 希陵の序				
3 耿延禧の序				
4 馮子振の序				
5 本文（巻一～二二）				
6 校讎（各巻末）	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			
7 音釈（各巻末）				
8 刊記（各巻末）	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			

これら流布本の組織内容を、さきにみた元版（内閣本）のそれと比較すると、大差をきたしていることがわかるであろう。すなわち、元版から削除されているのは、まず、姚寧の序・宗永の記、という古逸資料二点と、吉林の跋である。また、首部の簡目と各巻首の目録が省かれ、代りに首部に総目

録として模様替えをしている。一方、内閣本にない馮子振の序が登場しているのが注目される。この序は、流布本では最大の資料的価値をもつから、以下、万曆藏本によつて全文を掲げておこう。

続集宗門統要序

前集賢待制承事郎馮子振撰

建谿沙門永、沸鼎松声、濃茶粥面、髮鬢淨剗、肘睫俱醒。遂取仏祖単鉢余馨、牽連鼻孔、深燈冷燄、撓剔眉豪。追惟南嶽讓・青原思、従上の伝析之二派、楊岐会而上、始馬祖一伝十一世為南嶽宗、投子青而上、石頭遷伝一十世為青原宗。既次第其人、復次第

其語、号其書曰宗門統要。膏髓直指、皮膚破除、両葉流根、蔭雲霧砌、一策一警、一磕一築、政使投餅試水、舌全吞沒可把之漚。弘盡揚湯、智自雋不能言之味。元符之筆(已カ)絕、墜緒之踵漸移、元運天開梵田日闢、競尊氏之教、孰訣正途之岐。乃有古林茂和尚、彌重巖泉、名誼宇宙、親逢昭代垂億万禪之昌辰、徑補禪宗余二百年之縛譜。楊岐・黃竜下、起白雲端・保寧勇、隆慶間、真淨文・晦堂心、逮松源嶽・澗翁琰・心聞賁、又七世而止。投子・天衣下、起芙蓉楷・圓照本、逮石窓恭・靈隱光、又四世而止。南嶽下十二世接逮十八世、總二百八十六人、見錄機緣二百一十二則。青原下十四世接逮十四世、總一百二十人、見錄機緣四十七則。為宗門統要續集。示衲子坦途、開人天正眼。可謂、星分次舍、澄霄県璀璨之珠璣、春滿園池、徧界現芬芳之葩粵綱。一提而万目之羅大展、領一挈而千腋裘之裘畢舒、此岸舟來、焉用隔江喚渡、別峯塔立、何消聚土合尖。華笑浪拈、竹鳴休擊、然而茫茫業識、種種情塵、蠅

解冥鑽、蟬能旁蠹、鍼磁罔具、溟波迷犯斗之津、鍊錘徒施、沙穴失藏珍之所、忍粉然其看亂、將持此以安帰向。非古林堅硬脊梁、亞摩醯眼、施胆力於威音色相之上首、澡肝膈於歎光頂顙之最初、安得第一義諦、舌本放六合瀾、翻不二法門、脚跟勦諸方、露布學人、於此摩尼炳耀、台鏡互融、靜定中句意亭亭、卜度外話頭了了。作家罐輔、入煅鍊者、粒粒精金、旧宅宮商、依促拍者、冷冷雅操、豈比紗窓映月影弥、即而跡跡疎、布鼓認鼈音逾、侶而魄邈遠、鑄逢区治、劍凜然鋒、覩遇耆婆、艸渾是藥。海粟居士、早懶鑿脫、晚悟參尋、馮長老斜日夢回、記久別光明之洞。永嘉師一宿驚覺、尚相忘證道之歌。稽首宗乘、書心序引。

右の序文は、なぜか年記をもたないが、古林の『続集』編集に關して詳細に記載する点で、希陵の序が簡に過ぎるのをよく補つてゐる。その上、希陵の序が「宗門統要続集序」、耿延禧の序が「重開宗門統要序」のように、それぞれ原序題が改められてしまつてゐるのに対し、馮子振の序題は「続集宗門統要序」とあつて、原題名が保存されている。

序文の撰者、馮子振は、『元史』一九〇に伝がみえる。海粟道人と号し、博く經史を治め、詠まざる書はなく、また文に巧みであつた。官は集賢待制で、著に『梅花百詠』があるといふ。⁽⁵³⁾しかし、われわれとしては、本邦に伝存する暢達豪放な名蹟の作者であり、禪的教養の豊かな文人として、この人の名を忘れるることはできない。

こうした、元代一流の文人による序文をいただいた最初の『続集』こそは、さきにいう元末ごろに重刊された四明大慈寺本であつたにちがいない。大慈寺本は重刊に際して、宋代の編集状況を伝える姚莘の序や宗永の記などの古資料を削除し、これに代つて、『続集』の編集内容を詳述する馮子振の序を付して、古林の跋にみえる不備をも補おうとしたのであらう。いうなれば、前集的な色彩を排除し、『続集』の性格を強めんとしたものと思われる。そこには、禪録の増集過程における変化の典型が示されている。かくして、不要となつた古林の跋は、南蔵本にいたつて除かれ、組織内容は定着をみたものと思われる。

以上、『続集』が元代の原型から流布本にいたる間にとげた形式的変化をみてきた。所論が多岐にわたつたので、さいごにこれを項目別に整理しておく。

△書名△

『続集宗門統要』→『宗門統要続集』

△卷数△

一二卷→一〇卷→一一卷→一二卷

△目録△

総首の簡目
各卷別の目録

→総首の目録

△序題△

希陵の「続集宗門統要序」→「宗門統要続集序」
耿延禧の「新開宗門統要序」→「重開宗門統要序」

△序跋△

姚莘の序
宗永の記

→削除

古林の跋

馮子振の序→増添

七、前集の成立と諸本の系統

以上、『宗門統要集』の前集と『続集』の各テキストについて、書誌的な考察をすすめてきたが、前集は少なくとも宋代に七回、『続集』は同じく元代に二回、それぞれ刊行されていることが確認された。この数は、伝存本や記録にあらわれたものだけであるから、実際にはもっと多く、これに倍するほどの刊行がなされたことが推定されるのである。これは、従来の予想をはるかに超え、宋元代における禪籍の刊行史上、大部の叢書としては、『景德伝燈錄』とともに双璧をなすものであろう。⁽⁵⁵⁾

しかも、この両書は、さきにのべたように、二回ないしは四回もほぼ時々同じくして開版されていたのである。こうした事実は、宋代以降の本書に対する江湖の評価と、公案禪全盛期の禪界のさまを示すものである。したがつて、当代の

禪を研究するためには、今後は本書に対する基本的な理解が不可決といえよう。さらに一步をすすめるならば、『続集』はさておき、前集の編者と編集内容、また、本則と拈提宗師の數量や系譜上の特徴、などの考察が重要な基礎作業でなければならない。この点、後者については、すでに石井氏による労作がものされ、本書と『宗門聯燈会要』との関係も解明されるにいたつた。⁽⁵⁶⁾ そこでここでは、從来不明とされた編者宗永の為人と、その編集状況などについての考察をしてむすびとしたい。

すでに述べたように、叢山本と内閣本には、鄧山居士姚孳の序と宗永自身の記が遺存し、この方面的考察に光明を与えてくれる。まず、これらの二文を、ともに叢山本を底本とし、内閣本で対校してつぎに掲げよう。

宗門統要集序

鄧山居士姚孳撰

积子宗永、寓鴻山大円庵、入法界性三昧。從三昧安詳而起、閔諸禪病沈着断見。於開方便門、示真實際。上繇鹿苑、垂五十年、下逮曹溪、歷十二世、凡我仏祖演説、附以古宿拈提。沿波討瀾、挈裘振領、得一千余則、離為十卷、命曰宗門統要。將令觀者、目擊道存。書成、持以屬余序。余謂之曰、子亦知夫南方之鶴鱵乎。非滄海不遊、非梧桐不止、食則練実、飲則澧泉。非不灑然矣、而鷗得腐鼠、過而睨之曰赫。今子欲以古人之腐余、而嚇我邪。^{*}且円明妙心、正法眼藏、一豪端上、歷歷無虧、百草頭邊、明明物是。然

不可以色相聲音求、不可以語言知見解、譬諸夢幻非所謂無、又如虛空非實有體。而釈迦妄說於西乾、達磨妄伝於東震、子既已妄錄之、余又從而妄序之。以妄襲妄、非大惑歟。雖然、龜言細語、皆第一義、般若性空、不離文字。是以、建立門庭、必明宗旨、振提祖令、蓋有抑揚。故趙州以三機接人、而臨濟有四種料簡。雖或閑於語默、亦何碍於流通乎。苦海慈航、同歸濟度、牛皮露柱、請為証明。

元祐八年九月望日序

* 邪—耶 * 物—總 * 諸—如 * 謂—以

宗門統要集記

唯此一事実、蓋列祖直指、於見性如安心得髓、自東震道之、所以異焉、問答繇是雷轟、宗徒以茲星布^{*}。名編盛錄、何啻百家統宗會源、皆歸一揆。余嘗試論因緣語路、誠先德不得已而興、至今簧鼓棗林、何嘗不在是非同異之間者哉。既往不咎祈嚮可乎、輒搜古今節要機緣凡一千余則、首標宗胤、次列因緣、以至拈提代別、摭天先之要妙、通海內之見聞、就中刪補泛濫異同故、不雄成逆寡、蓋取乎大意而已。窮諸詳悉、如各人所集。可見此不備載、博覽賢達、無以封文見讓、則幸莫大焉。

時巨宋元符歲次庚辰中秋日 建溪宗永比丘錄次故書云云

* 異—底本補写、内閣本ハ「興」ニ作ル * 布—以下ノ三字、底本補写 * 「以至」ノ二字磨滅 * 天先—先天
* 「通海内」ノ三字磨滅 * 備—脩 * 「宗永」ノ二字、小

サク作ル

まず、姚莘の序であるが、この一文は元祐八年（一〇九三）といふ一世纪の年記をもつことに注意したい。撰者の姚莘は、『尚友錄』六や『乾道四明志』⁵⁷に略伝がみえる。慈谿（浙江省慈谿県）の人で熙寧の進士。元祐年間に武陵令に補せられ、のちに提挙成都府路平常等事を任せた。『桃花源集』の著作があつたといふ。

したがつて、右の序文は、かれが大鴻山に近い武陵（湖南省常德府）の令であつた時の撰述であろうが、当面の問題に資する事項を要約すると、左の三点であろう。

一、宗永は『統要集』を鴻山の大円庵で編集した。

二、内容は釈尊から曹溪下一二世までの公案集で、これに対する古宿の拈提一千余則を集めて『宗門統要』一〇卷とした。

三、本書に対し姚莘が序を付した。

すなわち、宗永は元祐八年（一〇九三）までに本書の編集を一応完成し、北方の武陵へ持参して姚莘に序を依頼したのであつた。かれが本書を編んだ大鴻山は、長沙の西北約一〇〇キロに位置し、唐代に靈祐の開いた禪苑として知られている。

北宋代には雲門宗と臨濟宗黃龍派の人々が歴住しているが、宗永が本書を編集した当時は、あたかも石霜下三世の真如慕詰（*一〇九五）が住持し、めざましい活躍をしていた。『禅林僧宝伝』⁵⁸の慕詰伝は、かれが紹聖元年（一〇九四）に

開封大相国寺の智海禪院に勅住するまで、一四年間にわたつて化をふるつた大鴻山における盛苑のさまを、つぎのように伝えている。（原漢文）

衆、二千指、約束する所と為すは、人人自ら律す。唯だ、粥罷には門弟の道を問うを受け、これを入室と謂い、斎罷には必ず大衆と茶を会するのみ。諸方は纔かに月に一再なるも、詰は之を講ずるに虚日なし。放參罷には、詰は自ら役を作し、使令の者、側に在るも、路人の如し。晨香夕燈、十有余年、夜は礼拝して茅を持し、殿廡の燈火を視、倦るる則んば帳を以て首を蒙み、三聖の堂にて仮寐す。⁵⁹初めは猶お浴するも、老ゆるに至つて浴せざること十余年なり。

じじつ、このころの慕詰が禪侶を接得するに卓抜したさまは、各種の僧伝や『林間錄』『宗門武庫』『羅湖野錄』などに、少なからずみいだすことができる。かくして、当時の大鴻山は各地からの宗徒が雲集し、一〇〇名もの禪侶が切磋琢磨する一大叢林を形成していたのである。

さきに紹介した古林の跋によれば、宗永は藏主職であった。やや年代こそ下るが、紹興初年に『古尊宿語要』二〇家を編集した僧艇守蹟も、蹟藏主として知られている。宋代に大部の禪録を編纂するためには、藏主の役職が最適であつたのかもしれない。ともあれ、大鴻山の宗永藏主は、まのあたりに見る北宋叢林の盛苑のさ中にあつて、一千余則の『統要集』

を編んだのである。その中に、大鷲山の関係者が陸續として登場するのは、ごく自然のなりゆきであつた。

『統要集』の全体的な性格は、古徳や仏祖の公案と、それに対する拈提・著語を系譜順に編集したところにあつた。したがつて、当然ながら、普ねく禪門で知られている公案そのよりも、拈提・著語の点に特色があり、江湖の関心もまさしくそこにあつた。宗永がいかなる祖師の拈提や著語を著録しているかについては、雪寶重顯の二二三回を別格とすれば、真如慕詰の七九回が最多である。宗永は、雪寶については語録などから採録したのであらうが、慕詰の語はみずからのみの見聞を多く著録したのであらう。それは、まだ成文化されぬままの親語であったと思われる。

他の大鷲山居住者をみると、開山の靈祐が一五回のほか、黃龍慧南に嗣いだ鷲山懷秀の一七回が注目されよう。懷秀は、『続燈錄』一二や『続伝燈錄』一五では、わずかの語句が伝えられるにすぎないが、『統要集』の収録はこれらをはるかに凌駕する古資料となつてゐる。おそらく、懷秀は慕詰に先だつ大鷲山の住持であり、宗永がその語を集めるのは容易だつたのであらう。

いつたい、宗永はたれの法嗣であつたのだろうか。この点

は新出資料もなにも語らぬ。『続燈錄』一には、雲門宗第七世で法雲法秀の法嗣に金陵天禧寺慧嚴宗永なる人があり、達

磨西來に関する機縁の語句一篇を伝えてゐる。法雲は一〇一、一〇九五の人であり、『続燈錄』（一一〇一）の編者、仏國維白も法雲の法嗣であつて、慧嚴の嗣兄に当る。

したがつて、もしも慧嚴宗永が『統要集』の編者であるならば、これを熟知しているはずの仏国がそれにふれないはずはないであろう。ところが、慧嚴の記事中には『統要集』との関係はおろか、出自の建溪や鷲山の藏主職などについても、まったく記載がない。かくして、この両者はやはり別人と見るのほかはないであろう。

所論は多岐にわたつたが、さいごに、当面の課題である『統要集』正統各本の系統をまとめておきたい。この点、すでに個々の異版を考察する際に、ほぼ系統についても考えてきた。まず、前集では、現存最古である淳熙六年刊行の東洋本は、紹興五年の四明思鑒禪人による重刊本の再重開であつた。一方の叢山本は、序跋や刊記などによつて、予章李氏本—莆田重開本（紹興三年刊本）—廬山・庵本—後刷本、の系譜が明らかとなり、しかも、後刷に二種あることが知られた。このように、前集では東洋本と叢山本が、二つの流れを形成している。

また、『統集』については、初刻の湖州道場寺刊行の内閣本—四明大慈寺本—南蔵本—北蔵本—万曆蔵本—黄檗蔵本、

という系統をほぼ確かめることができた。近代の刊蔵本は、万曆藏本によることを明記しており、縮蔵本も巻末の音釈こそ省かれているが、万曆藏本を底本とすると思われる。かくして、流布本は、比較的に単純な系譜を形成している。

問題は、内閣本の底本が、東洋本・叡山本のいずれの系統であつたかということである。この点で、序跋等の諸記事について、すでに掲げたように、内閣本は叡山本と一致するものが多い。反面、東洋本の特徴である紹興五年鄭湛の序と魏王の跋は、継承していない。

つぎに、本文の内容面での異同関係についてはどうであろうか。その特徴を知るために、現存する代表的な四本について、公案の機縁を有する祖師の人数と、これに対する拈提・著語の則数とを、各本の南岳下・青原下に著録される人数と則数とによって、それぞれ項目別に対照させたのが次表である。

下の表中、南岳下の一世までの欄における東洋本・叡山本と他本との相違は、卷六に附録として南岳下一二世の竜慶閑(黄龍の法嗣)を加えたためである。⁽⁶⁰⁾ すると、この人を附録していない内閣本は、前記両本よりも古い宋版を底本としているはずである。この宋版は、叡山本により近い莆田重開本か、または、そのまた底本である予章の李氏刊行本であろうと思われる。こうした系譜上の地位は、内閣本の全体的な資

料価値をあらためて認識させられるものである。
かくて、正統各本の系統図と年表を附録して、斯学の参考に供したいと思う。

続 集			前 集				
計	青原下 11世 ～14世	南岳下 12世 ～18世	計	青原下 10世迄	南岳下 11世迄	世 尊 六祖下	東洋本 1179
			614名	265名	249名	100名	
			1323則	554則	559則	210則	
			613名	264名	249名	100名	叡山本 1247
			1323則	554則	559則	210則	
131名	22名	89名	613名	264名	248名	101名	内閣本 1325
259則	47則	212則	1323則	554則	553則	216則	
131名	22名	89名	613名	264名	248名	101名	万曆藏本 1607
259則	47則	212則	1323則	554則	553則	216則	

- (1) 石井修道「宋代禅籍逸書序跋考」(『駒沢大学仏教学部論集』八)
- (2) 「宋版禅籍調査報告」(『禅文化研究所紀要』五)
- (3) 「『宗門統要集』について(上)」(『駒沢大学仏教学部論集』四)、及び石井氏前掲論文
- (4) 石井修道「真字『正法眼藏』の基づく資料について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』11)
- (5) 「東福寺普門院經論章疏語錄儒書等目録」(『昭和法寶総目録』三))による。
- (6) 石井修道「『宗門統要集』について(上)」によつて指摘される。
- (7) 「宋刊本刻工名表」(『長沢規矩也著作集』第三卷)中に著録される。
- (8) 柳田氏前掲論文、及び石井氏「『宗門統要集』について(上)(下)」(『駒沢大学仏教学部論集』四・五)の二論文。ただし石井氏の(下)の論文は昭和四九年一二月の公刊。
- (9) 抽稿「宋元版禅籍研究(五)——宗門統要集・宗門統要続集一」(『印度学仏教学研究』三〇—11)
- (10) 毎日新聞社刊『原色版国宝』10<鎌倉IV>N.60
- (11) 每日新聞社刊『重要文化財』21—P.86
- (12) 同右 21—P.123
- (13) 抽稿「『宝林伝』逸文の研究」(『駒沢大学仏教学部論集』一一)
- (14) 『宋史』1146(上海、中華書局刊本、P.8733)
- (15) 『重要文化財』21—P.127
- (16) 長沢氏前掲書 P.177
- (17) 長沢氏前掲書所収
- (18) 『文選』の紹興中明州刊本の補修版は、紹興一八年の補修である。〔阿部隆〕『中國訪書記』P.100b
- (19) 『昭和法寶総目録』3—969b
- (20) 同右 3—972a
- (21) 今枝愛真「『普門院藏書目録』と『元亨釈書』最古の写本一大道一以の筆蹟をめぐらす」(『日本書誌の片鱗』所収)
- (22) 『昭和法寶総目録』3—783c
- (23) 『五山版の研究』上—P.344b
- (24) 全一一卷で『中国仏寺志彙刊』第一輯16~20に収録。
- (25) 長沢氏前掲書 P.151
- (26) 『宋史』
- (27) 石井修道氏は、人の人を天寧寺慧沢に擬してゐる。
- (28) P.313a
- (29) 「塔銘」(『道園集』四八)
- (30) 1962 Z.2—28—3に収録される。
- (31) 『禅林象器鑑』卷一、区界類、十刹の項には、「1' 道場山護聖万寿寺。〔在湖州烏程県。〕」とある。
- (32) 福井保『内閣文庫書誌の研究』中の「和漢講談所の蔵書と内閣文庫」を参照。
- (33) 福井氏前掲書所収「内閣文庫所蔵林羅山関係文献解題」(P.293)、長沢規矩也「日華藏書印表初稿」(『長沢規矩也著作集』第七卷 P.366)等。

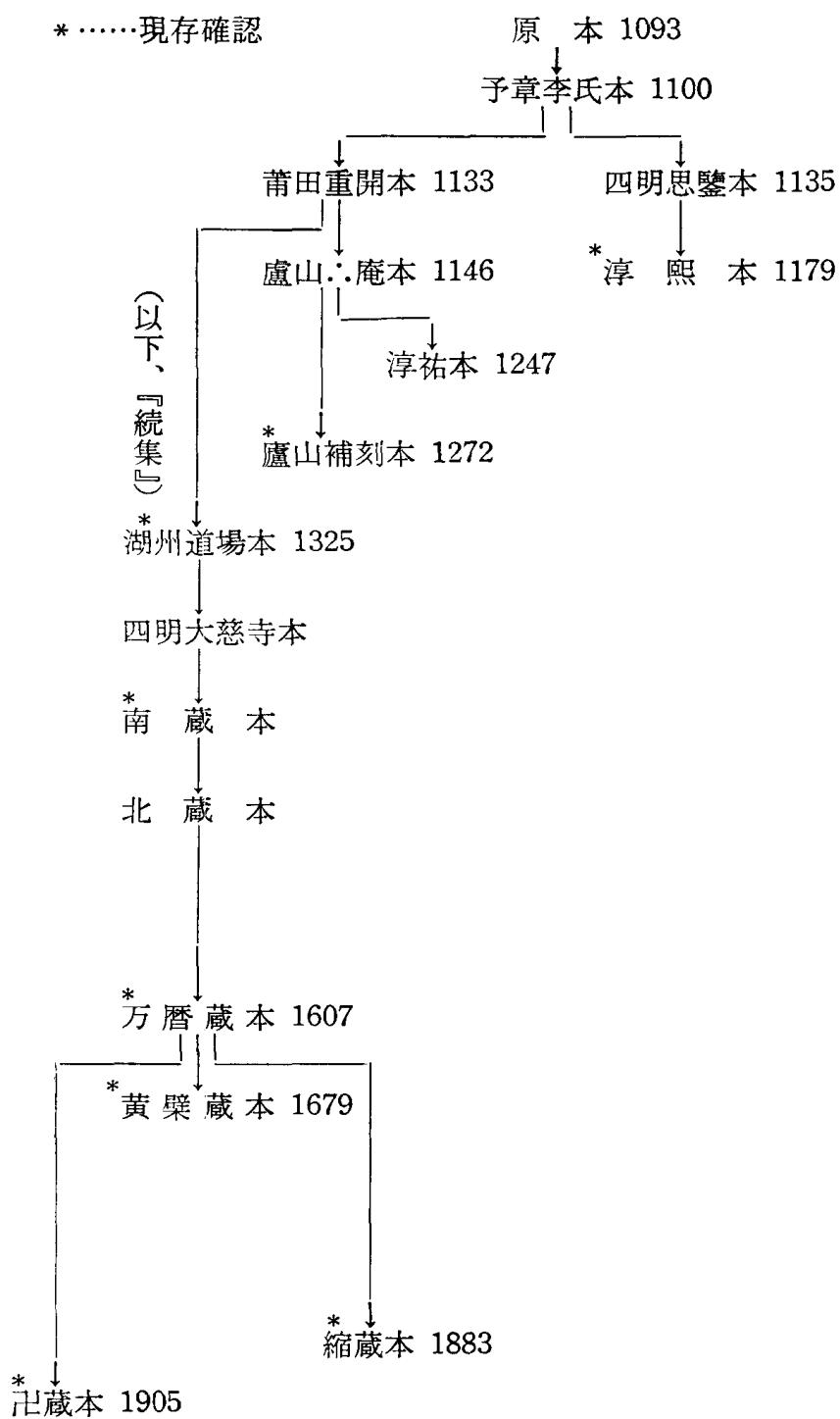
- (34) 『羅山楠先生集』附録、年譜及び行状を参照。
- (35) 内閣文庫所蔵の萃古齋鈔本による。
- (36) 吳晗『江浙藏書家史略』P.44
- (37) 『大東急記念文庫書目』序文参照
- (38) 『大蔵会展観目録』P.99b
- (39) 『大東急記念文庫貴重書解題』P.199a
- (40) P.178b
- (41) 前掲論文「『宗門統要集』について(上)」。なやかに論文では、大東急本の宋版卷七零冊のくわしい紹介もなされていない。
- (42) 佐藤秀孝「雪竇山の聞庵嗣宗について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』15)の附録、「大慈山教忠報国寺」の項を参照。
- (43) ハの至正15年版『景德伝燈錄』については、『大東急記念文庫貴重書解題』P.199b～200a' 及び、鈴木哲雄・椎名「宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察」(『愛知学院大学禅研究所紀要』4・5合併号)で紹介されてしまう。
- (44) 康熙10年序刊『鼎修常徳府志』卷一、地理志、沿革、14a
- (45) 『昭和法宝総目録』2-354a
- (46) 同右 2-296b
- (47) 『立正大学図書館所蔵明代南蔵現存目録』(一九八七年三月刊、タイプ印刷)、なお、本書中には竜谷大学図書館所蔵の南蔵零本の解題をも含む。
- (48) 大蔵会編『大蔵經一成立と変遷一』1-1、大明南蔵と大明北蔵、の項、及び長谷部幽蹊「明代以降における藏經の開雕」
- (49) 『愛知学院大学論集』一般教育研究310-31・4、311-1、311-1-1) を参照。
- (50) 禅籍六種の名と現存巻数はハのとおりである。『宗鏡錄』(巻1～10、111～1111、115～111、315～317、319、41～63、65～67、70～71、73～75、77～78、81、88～100)、『統伝燈錄』(巻1～6、9～11、13～16、18～110、116、118～31、34)、『天日中峯和尚広錄』(巻10、11中～18上、19～310)、『古尊宿語錄』(巻14～16、18～14、118～29、38～39、41～44、47)、『禪宗頌古聯珠通集』(巻7)、『宗門統要續集』(巻1～9、11～16、18～19)
- (51) ハの刊記は、山口県快友寺所蔵の南蔵本『古尊宿語錄』巻11に刻される靈谷寺淨戒の識語である。昭和10年11月8日、東京浅草の伝法院で開かれた第二回大蔵会に該本は出品され、その目録にハの刊記は著録され、柳田聖山「古尊宿語錄考」(『花園大学研究紀要』1) 中にその全文を引く。なお、立正大学の南蔵本『古尊宿語錄』巻11にも同じ刊記が存するという(前掲、野沢氏著書)。
- (52) 同右 2-3-1148d
- (53) 『元史』一九〇(上海、中華書局刊本、P.4340)
- (54) 毎日新聞社刊『原色版国字』10に作品11点を収録する。
- (55) 『景德伝燈錄』の宋代刊本は、筆者の調査によれば、田下のいづれ少なくとも八回を確認する」とがである。

- (56) 前掲石井氏論文「『宗門統要集』について（上）（下）」
 (57) 『乾道四明志』卷1—15b 〔宋元地方志三十七種〕八一
 4971)
- (58) 石井修道「大渢山の中興について—曹洞宗との接点を考慮

して」（『中國仏蹟見聞記』五）
 (59) Z.2Z10-3-269b～c
 (60) 石井氏前掲論文「『宗門統要集』について（上）」において
 指摘されている。

『宗門統要集』正統各本の系統図

△附録一



附錄二

『宗門統要集』正統各本関係年表

年月日	項目	年月日	項目
元祐八、九、望 元符三、中秋日	紹興三、二月 五年以前 五、一一、三 一六 二五 二七	一〇九三 一一〇〇	鄧山居士姚莘、『宗門統要集』に序文を付す 建溪の宗永、本書編集の記を撰す。この時に予章の李氏、本書を初め刊行か
(朝代鮮代)	(南宋)	一一三三 一三三 一三五 一三五 一四六 一四五 一五七 一一七九 一一八三 一一九七 一二四七 一二七二 一三二〇 一三二四 一三五三	莆田天寧寺の慧沢、新たに重開す 尤袤(一〇六八—一一三五)、藏書目中に本書を著録す 四明の思鑒禪人、重刊す 盧山・庵の劉居士、開版す 仲溫曉瑩、本書の機縁に対する所説を記す 陳実、本書を多く引用す 四明本を新たに重開す 晦翁悟明、本書を基に『聯燈会要』を編成す 介石智朋、本書を基に『宗門会要』を編成す 古月道融、四明思鑒禪人の本書刊行について批判す 無相劉居士、盧山・庵の板木で後刷本刊行 無相劉居士、盧山・庵の板木に補版を加えて刊行す 徑山万寿寺の虎谷希陵、古林清茂の『続集』に序を付す 金陵保寧寺の古林清茂、『続集』を完成す 湖州道場寺の玉山懷瑛西堂、『続集』を刊行す 大道一以、普門院の蔵書目中に前集三部を著録す 四明の大慈寺、『続集』を重刊す。この時、馮子振が序引を撰述
初期	期	一〇九三 一一〇〇	耿延禧「莆田新開宗門統要序」 『遂書堂書目』叢家類 鄭謁「統要序」 淨日の咸淳本刊語 『羅湖野錄』下 『大藏一覽集』 魏王の跋
中期	期	一一三三 一三三 一三五 一三五 一四六 一四五 一五七 一一七九 一一八三 一一九七 一二四七 一二七二 一三二〇 一三二四 一三五三	無文道璨「宗門会要序」 『叢林盛事』下 淨徹の叢山本跋 淨日の叢山本刊語 希陵「続集宗門統要序」 古林の跋
后期	期	一〇九三 一一〇〇	『祖源通錄撮要』中に前集を引用す 『南藏目録』 『祖源通錄撮要』 『南藏目録』 『普門院蔵書目録』 『大東急本卷一〇刊記』、馮子振の序引を撰述

(明代) 万曆三五 延宝七頃 文化五
明治一六 " 三八

初一期) 一六〇七 一六七九(一)
一八〇八 一八八三 一九〇五

大明北藏の扶・傾・綺の函に『続集』二一巻を入蔵刊行す
方冊本明藏中に『続集』二二巻を入蔵し、径山寂照庵より刊行す
黄壁版大藏経中に入蔵刊行
現大東急本の正続零本三冊一帙を改装す
縮藏の雲九・一〇に収録刊行
出蔵の三一一二に収録刊行

『北藏目録』 各卷末刊記
大東急本上冊識語 刊記
刊記